

博士論文審査結果の要旨

執筆者氏名：包聯群

包聯群氏の博士論文『言語接触と言語変異－中国黒龍江省ドルブットモンゴル族コミュニティを事例として－』は中国東北部の黒龍江省に位置するドルブットモンゴル族自治州において、モンゴル系住民のあいだに広く用いられる話しことばの実態を記述・分析するものである。本論文は、筆者の数年間にわたる現地調査を経て収集したデータに基づいて、その言語が漢語（中国語）・モンゴル語の両言語の接触によってモンゴル系住民というバイリンガル集団において生まれたいわゆる「接触言語」であると主張し、その言語は漢語とモンゴル語に由来する言語素材を組み合わせながらも、どちらとも異なる言語体系を有する独立した言語とみなすべきであることを実証することを目指している。論文は更にこの事例が社会言語学界で注目される混合言語のほかの事例との類似点と相違点を整理し、言語接触研究の観点からの議論も行う。以下では、研究対象となっている言語は特に名前がないため、論文筆者が与えた DMCL (Dorbed Mongolian Community Language の略) という言語名を用いる。

本論文は9章で構成されている。まず序章では、本論文で考察する11の課題を提示し、アジア大陸で話されているモンゴル系の言語及び論文に基づく言語データを紹介する。

第2章は黒龍江省ドルブットモンゴル族自治県の歴史の変遷、モンゴル系住民と漢民族系住民の人口の変遷、その地域の言語・教育政策の変遷を紹介し、DMCLの生まれた背景となる社会的状況を明らかにする。公式資料のみに頼ることなく、文献資料を現地調査で得たデータと組み合わせてその実態を見抜く努力がなされている。

第3章はDMCLの全体像を描く。そのソースである二つの言語（モンゴル語と漢語）と対照させながら音韻・形態・文法の主な特徴をまとめる。たとえば、DMCLにおける漢語由来の語彙形式がモンゴル語のストレスパターンに合わせられ、名詞がモンゴル語の格助詞をとり、全体の語順は基本的にモンゴル語の語順となることに基づいて、モンゴル語の体系が支配的であると述べる。また、本論文が多く参照する理論的枠組み (Bakker & Muysken 1994) が提示した「言語の絡み合い」(language intertwining) という概念を紹介する。

第4、5、6章はDMCLにおいて中国語由来の語彙形式がいかに関節語の形態・文法体系に組み入れられているかを示すために、それぞれ動詞、形容詞、そして名詞関連の言語現象の記述と分析を行っている。第4章は中国語由来の動詞とモンゴル語由来の接辞の組み合わせの規則を描く。第5章は中国語由来の形容詞がDMCLに取り入れられる際、一

律に [di:] という接辞が接続される現象と形容詞の強意形をつくる接中辞の挿入現象の記述を通じて、モンゴル語とも中国語とも異なるルールの存在を指摘する。第6章では、DMCL が中国語の名詞を借用する際に、モンゴル語に存在しない類別詞（いわゆる助数詞）も取り入れる傾向があることを述べる。また、中国語起源の名詞に見られるモンゴル語同様の接中辞の挿入などという複雑な形態変化を詳細に記述する。この三つの章における詳細な記述を経て、DMCL が独自の形態・文法規則を有する事実が浮かび上がり、起源言語であるモンゴル語と中国語から独立した言語体系の存在が実証されている。

第7章はDMCL の話し手に対するアンケート調査を紹介し、言語に対する意識を論じる。第8章は社会言語学研究における言語接触論、言語接触による言語変異、そして混合言語といった研究分野の観点からDMCL の形成過程とその性質を論じる。DMCL はモンゴル系住民内部のコミュニケーション手段である点に着目し、モンゴル人がモンゴル語から漢語へと切り替える長期的なプロセス（language shift）において、民族アイデンティティーの指標としての役割も果たしているという見方を提示した。第9章は全体のまとめである。

包聯群氏の論文は、言語学的な記述がなされていない、名前すらない言語を、綿密な現地調査を通じて収集したデータに基づいて記述・分析し、漢語とモンゴル語の接触によって生まれた混合言語の事例研究を成し遂げた。ドルブットモンゴル族自治州という特定の地域で話されていることばの記述ではあるが、黒龍江省に住居する6万人のモンゴル人のあいだに類似した言語がかなり用いられていると想定でき、本論文がその言語の最初の本格的な記述・研究であることは特筆すべきである。審査委員から、モンゴル語と漢語の接触は中国内で広範囲に生じており、本論文で扱った黒龍江省の事例は、一つの典型的なケーススタディとして、今後の研究の基礎になりうるものであるという評価を受けた。またほかの審査委員が、本論文はアジアの言語同士の混合言語の事例研究として、言語接触理論の構築に大いに貢献するものであるという評価を受けた。

その一方で、課題が残されていないわけではない。審査委員から、DMCL の音韻・音声に関する記述が不十分である点、ドルブット地域のモンゴル方言や行政区の歴史変遷についての先行研究に対する目配りが必ずしも十分ではない点などが指摘された。しかしこれらの不備は本論文の学術価値を些かも損なうものではない。包聯群氏の博士論文の研究内容の幅広さ、扱う研究題材の重要さとオリジナリティ、研究全体の独創性は非常に顕著である。したがって、本審査委員会は包聯群氏の論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。